

2022

新春鼎談企画Ⅰ

熊本大学×熊本大学病院×熊本県医師会

コロナ禍で問われる、地域の医力――

先進の医学×連携の医療

熊本 医の新時代

2021年――世界が新型コロナウイルスに明け暮れた激動の一年だった。ウイルスは変異を繰り返し、猛威となつて、感染の波をもたらし続けた。人の流れと経済の動きが止まり、私たちの暮らしは一変した。だが、そんな未曾有の災禍にあつても、熊本の医療は機能した。特定機能病院である熊本大学病院を中心に、地域の医療機関が連携し、県民の健康と安心安全を支えた。近代医学の先駆地として発展し、先進の地域医療を実現してきた熊本大学の底力が発揮された。2022年新春に当たり、熊本大学の小川久雄学長と熊本大学病院の馬場秀夫病院長、そして熊本県医師会の福田稠会長による鼎談の機会を設け、朝日新聞熊本総局長の島田耕作が、熊本の医学と医療について聞いた。

世界に猛威を振るつた新型コロナウイルス 大打撃の一方で社会の良い変化も

――2021年を振り返っていただけますか？
特に印象に残ったことがあれば教えてください。

小川 一昨年から続いています。新型コロナウイルスは患者さんの受療行動に変化があり、受診控えなどから、がんなどの診断や治療が遅れたケースも出ました。一方で、多くの方が、医学の進歩の速さを実感したと思います。診断法としてPCRが登場し、ワクチンが短期で作られて活用されました。

福田 印象に残ったのは、コロナへの対応です。第3波に始まり、第4波、第5波と次々に感染の波が襲ってきました。都心部では医療崩壊が起こり、世界一とも言われる日本の医療がどうしたんだ、という声も聞こえました。国内だけを想定したなか、未知なる外敵が入ってきた。想定外で、即座の対応に苦労しましたが、ポテンシャルがあるから何とか持ちこたえ、体制を組み直すうちに対応できるようになっていきました。次は第6波にどう備えるかです。

馬場 新型コロナウイルスが蔓延して、医療崩壊の危機が叫ばれるなか、熊本県は体制が保たれていたと思います。6年前に起こった熊本地震の経験が役立ったのでしょうか。

――全国でコロナウイルスが蔓延して、医療崩壊の危機が叫ばれるなか、熊本県は体制が保たれていたと思います。6年前に起こった熊本地震の経験が役立ったのでしょうか。

馬場 被災の経験が現場で何かに活かされたかという点、県や市などの行政、医師会、医療機関、看護協会など、それぞれの連携が非常によく取れていたところだと思っています。第5波では、患者さんが増えて、1日300人を超すような時期もありました。このときも最初の段階で、入院、宿泊療養施設利用、自宅待機と、患者さんの振り分けがうまくできました。病床の利用も、準備した内の60パーセントほどで対応でき、医療が崩壊に至ることはありませんでした。急場はどう対応するべきか、行政も医療現場も、一定レベルのノウハウを持つているように思います。



熊本大学病院（外来診療棟側）
2021年9月30日をもって
再開発整備が完了した

が、やはり地震や豪雨で連携の重要性を学び、連帯感を培ったことが迅速な対応につながったのだと思います。もう一つは、熊本大学病院の活躍が大きかった。熊本県を中心とする最高峰で最先端の医療機関が、軽度な症状から広く目を配り、基幹病院を統率しました。感謝しています。

ウィズコロナという生活の新基準 新展開の期待と懸念されるリスク

――いわゆるウィズコロナという考え方が、生活の中に浸透してきました。大学や病院での活動にも変化があると思います。この変化をどう受け止めていますか。

馬場 人と人の接触を避けるために、授業も会議もリモートで行うことが多くなりました。学会もリモートで開かれたりします。これにはメリットとデメリットがあります。メリットは、移動する時間や経費、労力を節約できること。海外の授業や会議にも、現地にいかけることなく、手軽に参加できます。デメリットは、コミュニケーションの機会が制限されること。学生時代に得る、クラブ活動や社会活動などの経験は貴重です。社会に出るための糧となります。それができずに、一人の世界での生活が長くなると、長期的な影響に不安が出ます。

小川 AIやデジタル関連の技術をさらに伸ばしていくチャンスだと捉えています。ただ、リモート会議が主流になり、コミュニケーションが希薄になりかねないことを心配しています。対面によるやりとりは、医療では特に大切です。また、情報入手という点でも課題があります。例えば、まだ公にできない情報も、学会に出かけること

熊本大学

おがわ ひさお
小川 久雄 学長

熊本大学医学部卒。
1984年より31年に渡り、
同大学に医員、助手、講師、助教授、教授として奉職。
国立循環器病研究センター理事長などを経て
2021年、第14代熊本大学学長に就任。
専門は循環器疾患全般、多施設共同臨床研究



で、研究者から直に話を聞けたりします。最先端の貴重な情報のやりとりが難しくなっている点は危惧しています。

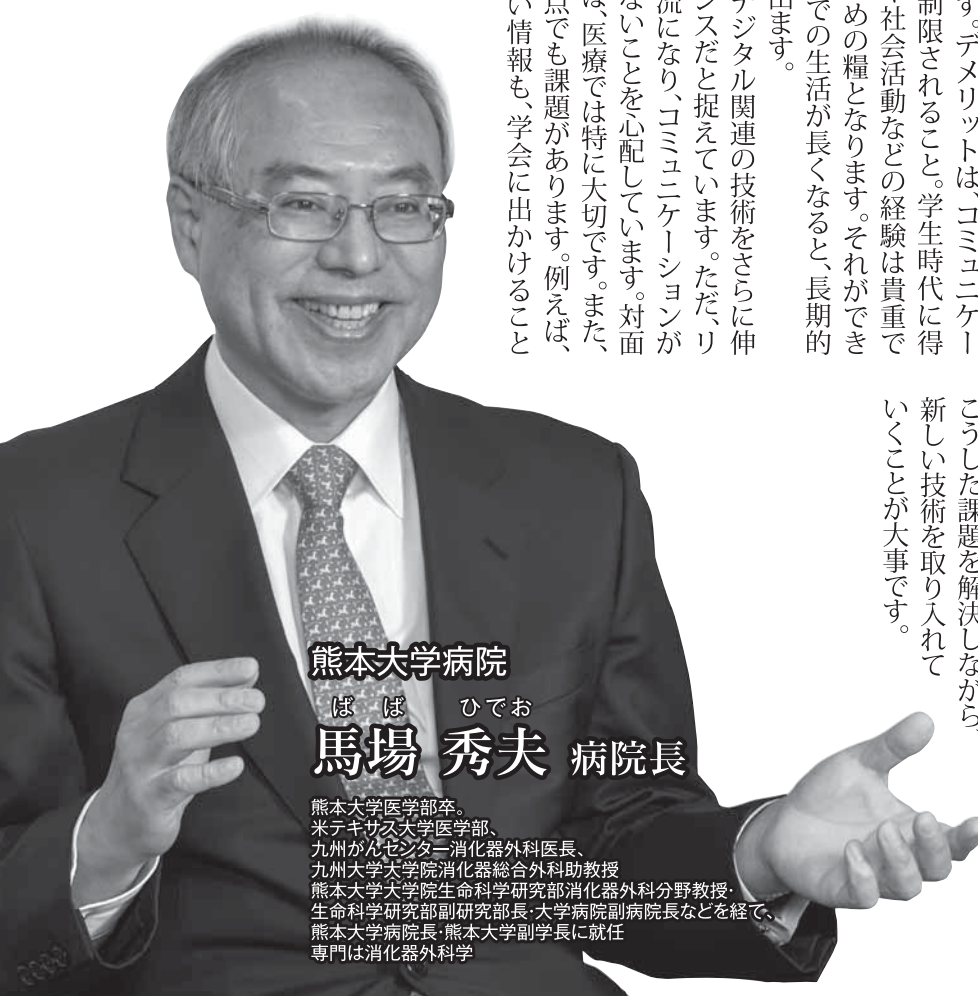
福田 コロナによって、オンライン診療の導入が加速した面があります。多くのメリットがある一方で、デメリットもあります。特に、初診の患者さんをどうするか、ということです。臨床では、患者さんとしつかり向き合い、医学的な知識を正しく提供することが求められます。最初からオンラインで診るのは、大変難しい。

こうした課題を解決しながら、新しい技術を取り入れていくことが大事です。

熊本大学病院

ばば ひでお
馬場 秀夫 病院長

熊本大学医学部卒。
米テキサス大学医学部、
九州がんセンター消化器外科医長、
九州大学大学院消化器総合外科助教授
熊本大学大学院生命科学研究部消化器外科分野教授・
生命科学研究部副研究部長・大学病院副病院長などを経て、
熊本大学病院長・熊本大学副学長に就任
専門は消化器科学



近代医学先駆地で広がる——医のネットワーク

先進の医学×連携の医療

熊本 医の新時代

プラス

熊本は、近代医学の先駆地として知られる。熊本大学医学部のルーツは、1756年設立の藩校まで遡る。明治維新後は、熊本医学校開校以来、北里柴三郎をはじめ、優れた人材を輩出してきた。時代を超えて受け継がれてきた医の志は、現在の地域医療にも表れる。熊本大学病院と熊本県医師会を中心に連携が進み、県民に高度な医療を提供している。2022年新春に当たり、熊本大学の小川久雄学長と熊本大学病院の馬場秀夫病院長、そして熊本県医師会の福田稠会長による鼎談の機会を設け、朝日新聞熊本総局長の島田耕作が、熊本の医学の歴史や地域医療について聞いた。

近代日本医学の父を生んだ先駆地 世紀を超え連綿と続く研究の歴史

——熊本は、日本細菌学の父と言われる北里柴三郎や日本女性初の医学博士・宇良田唯などを輩出した地です。熊本の近代医学史についてお話しいただけますか。

小川 熊本は全国有数の医学の先駆地でした。江戸時代に、日本初の公立の医学学校・再春館が創設された地としても知られます。再春館から数えると250年以上の歴史があります。

馬場 再春館を創設したのは、細川第六代の重賢公です。創設は宝暦6年1756年で、以来、脈々と受け継がれる伝統と歴史の中で、多くの偉人を輩出してきました。

福田 再春館は、明治3年・



宝暦	再春館 宝暦6年9月(1756年)
	(官立) 医学校兼病院 明治4年7月(1871年)
	(私立) 熊本医学校 明治29年2月(1896年)
	(私立) 熊本医学専門学校 明治37年2月(1904年)
	(県立) 熊本医学専門学校 大正10年4月(1921年)
大正	(県立) 熊本医科大学 大正11年5月(1922年)
	(官立) 熊本医科大学 昭和4年5月(1929年)
	熊本大学 昭和24年5月(1949年)
昭和	
平成	

先生など日本のトップレベルの研究者を招聘し、基礎研究を活性化させました。

福田 林先生は怖い先生でしたが(笑)、ずいぶん可愛がっていただきました。先生のご尽力もあって、熊本大学医学部は免疫学研究のメッカと呼ばれ、全国でも中心的な役割を果たしてきました。

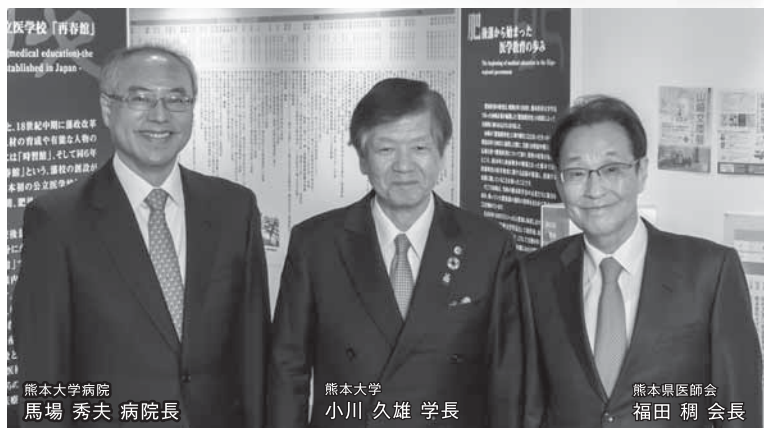
小川 発生医学研究所の基をつくった山村研一先生を呼んだのも林先生です。先見の明があり、思い切った人事をされた。こうした取り組みが財産となって、現在の熊本大学医学部があります。

全国に知られる先進的熊本モデル 熊本市を中心にする地域医療

——熊本県の医療の特徴について教えてください。

小川 熊本県は、県内に医学部のある大学が1つ、大学病院が1つです。関連病院には、大学病院から多くの人材が派遣されていますので、しっかりとネットワークがあり、連携も取れています。そして、県医師会とのパイプも強い。地域医療を行う上で理想的な環境にあると考えます。

福田 熊本大学病院を中心に、基幹病院が先端的な医療を提供する。一般の民間医療機関はできるだけ温か



特定機能病院の熊本大学病院があり、基幹病院が集中しています。しかも熊本県が1時間半構想というプロジェクトを進めていて、県内各地から熊本市までほぼ1時間半以内で来られるような道路網が構築されています。アクセスという意味でも恵まれ、医療的に極めてありがたい。また、天草地区はドクターヘリを使ったり、人吉地区には八代市を中継基地として位置づけたりして、カバーしています。離島や遠隔地はありますが、他県と比べても地域医療はうまく機能していると思います。

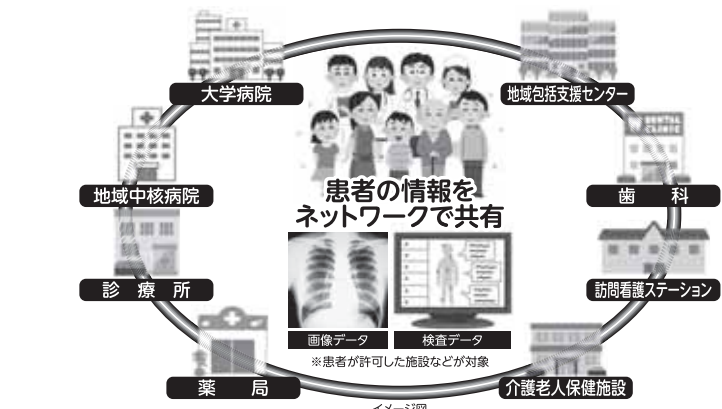
県の地域医療等情報共有システム くまもとメディカルネットワーク

——熊本県独自でつくる医療や介護の情報ネットワークがありますね。詳しく教えてください。

馬場 くまもとメディカルネットワークといいます。熊本県、熊本県医師会、熊本大学が連携して取り組んでいる情報共有システムです。ネットワークに参加している患者さんの情報を、熊本県内の医療機関や介護関連施設などで共有して、医療や介護などのサービスに生かします。災害時などに患者さんのカルテがなくても、ネットワークから情報を取得することができます。

小川 県南部を中心とした令和2年の熊本豪雨で、何人もの患者さんのカルテが流されてしまいました。薬手帳を持っていなかったり、紛失したりしている人もいました。このとき、くまもとメディカルネットワークによる情報で、すぐに患者さんの薬の処方のできたりしました。

福田 コロナ禍でも、存在価値が高まっています。新型コロナウイルス感染症の軽症患者の中には、宿泊療養施設を利用している方もおられます。



くまもとメディカルネットワーク
 熊本県独自でつくる地域医療情報等のネットワーク

馬場 一方で、残念ながら、まだ地域や医療機関による格差があることも事実です。情報共有によるメリットの大きさを考えていただき、協力いただけるとうれしいです。行政、医師会、大学とも、目指すところは、患者さんのためになりたい、ということです。今後も積極的に取り組みを進めてまいります。

——くまもとメディカルネットワークが隔々にまで広がっていくといいですね。患者さんのためになる医療が、さらに前進することを期待します。ありがとうございます。

馬場 地理的なことを言えば、熊本県は九州の真ん中にあります。九州各県との連携が取りやすく、アジアの玄関口にも当たります。今後、熊本の医療が脈々と受け継いできた流れや先進の医療を世界に向けて発信していく上で恵まれていると考え